

第 17 回早稲田矯正保護展報告

Paix² と学生との対談

『高年齢者の再犯防止』について

第 17 回早稲田矯正保護展実行委員会

1 第 17 回早稲田矯正保護展の概要

2012（平成 24）年 11 月 29 日（木）に、早稲田大学早稲田キャンパス小野記念講堂において、第 17 回早稲田矯正保護展「高年齢者の再犯防止—司法と福祉の架橋となるために—」が開催された。

今年度は三部構成での開催であり、第一部では、NPO 法人全国就労支援事業者機構事務局長、日本社会事業大学客員教授の山田憲児氏による講演「刑務所出所者等の社会復帰支援について」が行われた。第二部では、矯正施設でこれまでに約 200 回以上の慰問コンサートを開催している Paix²（ぺぺ）によるスペシャルライブのほか、高年齢者の再犯防止に関して Paix²のお二人与学生との間でトークセッションも行われた。最後に第三部では、「高年齢刑務所出所者の生活の『定着』とは何か」をテーマに学生からの研究発表が行われた。

この内、第二部での Paix²のお二人与学生との間でのトークセッションでは、数多くの矯正施設を訪問している Paix²のお二人から、それら訪問を踏まえた矯正施設の現状と課題に迫る指摘があったほか、本矯正保護展を開催するまでに学び・感じた学生からの斬新な疑問点の提示などがなされ、大変有意義なものとなったため、ここに当日の開催内容を記したい。

【第 17 回早稲田矯正保護展概要】

テーマ： 高齢者の再犯防止 ―司法と福祉の架橋となるために―

日時： 2012（平成 24）年 11 月 29 日（木）13：00～17：00

場所： 早稲田大学早稲田キャンパス小野記念講堂（27 号館）

主催： 早稲田大学法学部公認サークル「犯罪学研究会」、法学部石川ゼミ、
文学部藤野ゼミ、法学部小西ゼミ、早稲田大学広域 BBS 会、更生保護
法人更新会、保護司稲門会、早稲田大学社会安全政策研究所

後援： 新宿区

【第二部 Paix²のお二人と学生との間でのトークセッション登壇者】

Paix² Manami（まなみ）

Paix² Megumi（めぐみ）

学生 野上智行（早稲田大学文学部 3 年）

学生 長谷部悦郎（早稲田大学法学部 3 年）

2 第二部 Paix²のお二人と学生との間でのトークセッション

野上：では、トークセッションの方に向かっていきたいと思います。わたくし、トークセッション担当で早稲田大学文学部の野上と申します。

長谷部：同大学法学部の長谷部と申します。よろしくお願ひします。

Paix²：よろしくお願ひします。

野上：例年の矯正保護展では Paix²のお二人にはライブのみをしていただいていたのですが、今回は学生の方から、数多くの矯正施設において慰問コンサートをされている Paix²のお二人に、お話をお伺いさせていただきたいと思い、このようなトークセッションを企画させていただきました。これから学生の方からいくつか質問をさせていただこうと思いますので、宜しくお願ひします。

長谷部：では、さっそく一つ目の質問にうつらせていただきたいと思います。

全国の矯正施設でコンサートを行われている Paix²のお二人ですが、第二部前半のライブでもお話にありましたように、最近のご活躍の場を矯正施設以外にも広げられているということをお伺いしました。先日は、北海道警察とのかかわりでコンサートも開催したとお伺いいたしましたが、どのようなものだったのか、そのエピソードについてお聞かせください。

Manami：矯正保護展で歌ったことがきっかけで北海道県警のイベントに参加させていただくことになったんですよ。

Megumi：そうなんです。2007（平成 19）年の第 12 回の早稲田矯正保護展から Paix²はコンサートを開催させていただくようになり、そこで主催団体の一つである法学部石川ゼミの指導教授の石川正興先生と関わりをもたせていただくようになったのですが、その石川先生とのご縁で、「北海道犯罪のない安全で安心な地域づくり推進会議」主催で 2012（平成 24）年 5 月 11 日に開催された「安心・安全なまちづくり」というイベントにも参加させていただいて、いろいろなお話もさせていただきました。コンサートとお話しをさせていただく機会を得られて、Paix²の活動範囲が広まったのも、こちらの矯正保護展のおかげなので、本当にみなさんには感謝しています。

Paix²：ありがとうございます。石川先生ありがとうございます。

野上：ありがとうございます。では次の質問にうつらせていただきたいと思います。

今回の第 17 回早稲田矯正保護展では、「高齢者の再犯防止」ということをテーマに、私たちは研究をすすめてまいりました。その中で、高齢受刑者が刑務所を出所した後、社会的・経済的な理由などから、また再犯してしまうという現状があり、どのようにその出所者を福祉サービスにつないでいくかということの研究しました。その研究の過程で社会福祉施設などの関係機関を訪問させていただいてお話を伺ってきましたが、とある訪問先で、出所者の中にはそういった福祉サービスになかなかつながらない方がいらっしゃるというお話がありました。なぜつながらないのかということを探ったところ、出所者が「自由」を求めて福祉への道を自分から断ってしまう、ということをご教示いただきました。Paix²のお二人は、彼

らの言う「自由」とはどのようなものだと思いますか。

Megumi : 私は最初、矯正施設を出所した時点で、自由なのかなと思っていました。しかし、よくお話を聞いていると、結局、出所しても特に高齢者は、体が弱かったり、働き口もなかったりして、再犯をしてしまう方もいらっしゃる。そういった現状があるので、福祉サービスをどうぞと、刑務所の方もすすめているようですね。

野上 : はい。そうだと思います。

<トークセッションの様子> 左から Paix²の Manami さん、Megumi さん、文学部 3 年野上智行君、法学部 3 年長谷部悦郎君。当日は多くの訪問者があり、盛会に終わった。



Manami : でも、それを嫌がる方がいらっしゃるということですよ。しかし、結局、再犯をして、刑務所に帰ってきてしまうというのは、私たち社会としても、ご迷惑な話じゃないかと思います。出所された方が本当に自

立して、一人でやっていかれるのであれば、それはそれで結構なんですけども…。なかなか難しい問題ですね。

Megumi : 私は、高齢受刑者の方が、自由が奪われるって思ってしまうような生活環境とか人生を歩んでしまったために、人の気持ちをなかなか理解できなかつたり、また受け止められなくなつたりしているの、長年受刑生活を送ってしまっているのではないかと思います。高齢になるまでの間にその方が、何か自分の大切なものとか、自分の人生を真剣に考えるきっかけがあれば、そういう人生にならなかつたのではないかと思います。お話にあがっている福祉の道を自分で断たれてしまう人は、たぶんどのような形をとられても、やっぱり自分の考えが中心になってしまい、まわりの優しさがわからないので、たぶん答えがでず、福祉を拒んで犯罪を繰り返してしまっているのではないのでしょうか。

ただ、高齢受刑者の内、受刑者という言葉を抜いて、高齢者の方って考えると、高齢者の方は体の自由がきかないし、気持ち的にもなかなか前向きになれないっていうことが誰でもあると思います。受刑者の方に限らず、高齢者の方っていうのは、わがままになりがちなんだと思います。実際に、おじいちゃんとかおばあちゃんとかに対して、一緒に生活されている家族の方とかは、自分のことばかりなのかなって思うと思います。なので、高齢になるまでの間に、社会にそうやって道に迷ってしまうような気持ちをもたないような生き方とか仕組みとかがあればいいですし、あとは個人個人がどのような目標で生きていくかということが大事ではないでしょうか。私自身は、そういうことなのではないかと感じています。

野上 : 実際、一人一人にいろいろな人生経験があつて、みなさん十人十色だと私も思います。そのなかで、ある程度一定の人たちは道を外れてしまうと思いますが、どんな社会でもそのような人がいてもいいのではないかと考えています。そういうときに、矯正施設がその道を正す役割を果たせばいいと考えますが、その役割を果たすためには、どのような処遇・介入の仕方をすればいいと思いますか。

Manami : 刑務所に収容されている人は刑を受けているので、基本的な自由を奪われて生活をしていますが、私は昔からいつも、教育的な処遇をもつ

と入れないといけないのではないかと考えています。最近、教育的処遇日といって、月に2回くらい平日に工場での処遇（刑務作業）を休んで、教育につながる映画を観たり、私たちもコンサートをやらせていただいたりしています。このようなことなどを通じて、考え方の改善をしていかないといけないと思います。なかには一生懸命頑張って、本当に反省して被害者や遺族のことを思っている人たちがいる中で、どうしても一部の方は教育を受けたくないと考えるのではないかと思います。先ほどお話にあがった高齢者も、一部の教育を受けたくない人と同じく、福祉に繋がってもらわないと私たちも困ってしまいます。再犯が無銭飲食だったとしても、犯罪をして、刑務所に戻られてしまうと、私たちの税金で処遇が行われるわけですね。それで、高齢受刑者ということで、衣食住全部そろって、しかも介護をしてもらえないかもしれないところに行くというのは、至れり尽くせりだと感じてしまいます。かえってその方が社会にいるよりもいいかもしれません。それは、私たちも困ります。なので、もっと刑務所の中で、教育を入れていかないといけないのではないかと思います。

Megumi : 最近、民間の協力も大事だといわれます。私たちもこの活動を通して出会ったのですが、とある会社の社長さんがいらっしゃいます。その方は元受刑者の方を自分の職場で働かせて、自分の人生を歩んでほしいと考えている方で、実際に現在も何人か職場で働かせているそうです。刑務所の中では、同じ規則で、何年も規律正しく生活できると思います。しかし、社会で本当に働きたい、やり直したいって思われる方の中には、働く場所がなくて、また再犯をしてしまうパターンが多いようです。なので、そのようなお話を伺うと、社会で受け皿がたくさんないと再犯防止にもつながらないし、その問題は高齢者を含めて年齢問わず存在するものだと思います。今後は Paix² も慰問コンサート活動をしているので、そういったことにも参加できたらなと思っています。社会もそのような体制がどこかで整っていけば、再犯の多い現状が変わっていくのではないかと思います。

野上 : 先ほど民間の方に犯罪者処遇の現状を広めていく必要があるのではないかとご指摘がありましたが、私たちが研究をしている中でも、その

ようなことをしないと出所者はなかなか社会に溶け込めないのではないかという考えに至りました。Paix²のお二人のライブ活動もあると思いますが、他にどのような活動をしたら犯罪者や出所者がもっと社会に受け入れられやすくなると思いますか。

Megumi：そうですね…。ある程度技術などが必要なものなら、それをマスターしてからじゃないと出所者は働けないと思います。ただ、単純な農作業など、そうじゃないものもあると思うので、そのような仕事をマスターする施設があって、まずはさほど難しい知識や技術がなくても働ける、働きやすいものがあるといいのではないのでしょうか。そして、そこで得られた賃金などを活用して、それから先に自分が本当にやりたいと思うものに投入して、そこから卒業するという形が、私の中ではベストだと思っていますので、そのような施設が増えるといいのではないかと思います。

長谷部：なるほど。ありがとうございます。

まだまだお話をお伺いしたいところですが、そろそろお時間の方がきてしまいました。今日は Paix²のお二人ならではの貴重なお話をありがとうございました。

Paix²：ありがとうございました。